

2020年10月18日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「持続可能な信仰」へブライ 12章 1～2a、11～12節 牧師 広木愛

「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」

「肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。」

このコロナという制限がある中で、その生活に慣れてしまっている私がいることを感じています。以前は全く違っていただけなのに、なんだかこれが当たり前だったかのようにこの生活にすっかりきています。マスクをする、消毒をするなど、この生活が当たり前になりつつあるのでしょうか。

教会の中にあつた、日常の中にある枠が取っ払われた中で、毎週教会で礼拝をするべき！というわたしたちの当たり前が簡単に崩れていきました。

コロナによって、大井教会がこれまで大切にしてきた信徒活動をはじめ、委員会、教会学校の行事がすべて中止せざるを得ない状況に追い込まれました。今、幼稚園の働きはずっと続いています。そのほかの教会学校や教会の働きとしては公園クラスだけが毎週毎週続けられています。

社会もテレワークやオンライン化が進んできました。教会でも、いくつかの委員会やチーム、教会学校の分級、また有志の祈祷会もオンラインのシステムを使って会議や分級を持っています。教会に集まって一緒に会議をする、聖書を分かち合う、祈りを分かち合う、その形がどんどん変わっています。

このコロナによってもたらされた変化。インターネットを使いながら、そして今まで通りの電話や郵送という方法を合わせて新しい教会の交わりが作り出されようとしているのではないのでしょうか、この変化は、私にとって最初は違和感とも思え

るものですが、この変化の中にも神さまの計画があるのかもしれない、それは神さまからの鍛錬ととらえるのならば、わたしたちのこの歩みの後には、平和に続く道を今進んでいるのだらうと信じたいなあと思わされています。

ある研修会で、「うちの教会は、礼拝堂に集まれなかった時期、礼拝を休止しました。」という表現をされた方がいらっしゃいました。この言葉を聞いて、漠然と大井教会では礼拝続けていたと思っていた自分に気づかされました。

通常の教会の働きと、コロナという異常事態を同等に考えることはできませんが、この長く続くと思われる状況の中で、これからわたしたちはどのように生きていくのか、その答えは、信仰の創立者、そして完成者であるイエス・キリストという方の生き方を、まなざしを見ていたら、わかってくるのだということなのかなあと思っています。

教会の諸活動で、緊急事態宣言が出されたときにでも続けられていたのは、礼拝です。礼拝のスタイルが変わったとしても、その中心にあったものは、神さまの言葉です。大井教会の礼拝が、第一礼拝、第二礼拝、そして夕礼拝と異なる時間、異なるスタイル、それでも大井教会の礼拝だと大切にしてきたその中心は、「神さまの言葉」がそこにあって、神さまから呼び集められたわたしたちだから・・・だったのでないのでしょうか。

わたしたちの信仰の歩みは、これまでの大井教会に連なってきた先達たちが祈りによってつくってきたださったものです。その歩みを続けるために、わたしたちが中心に置くものは、信仰の創始者、そして完成者のイエスさま、神さまからのみ言葉なのだらうと思います。

Withコロナの生活は持久力が必要になりますが、イエスさまと共なる歩みはもっともっと持久力の必要なレースです。そのレースを走り切るために、走るというよりも歩き切る・・・という方がいいのかもしれませんが、イエスさまが大切にされた神さまの言葉を生きる糧として、わたしたちそれぞれに与えられた歩みの上で一歩一歩大切に歩んでいければと思っています。

コロナ危機の中でも変わらずわたしたちに与えられる「神さまの言葉」信仰の完成者であるイエス・キリストという方を見つめながら、今だからできる神さまの働きに共に仕えてまいりましょう。